

大間違いの子規

西をさむ

□月□日没ス享年三十□年 月給四十円。

これは子規が此の世から旅立つおよそ四年前、自ら書いた墓碑銘最後の一行である。体が虫食まわれ、苦痛、絶叫、絶望の続く日々の中、彼は何を見出し、何を残そうとしていたのだろうか。

彼の生い立ちを記すには、年号、明治を使うと年齢と一致して時代考証に便利である。明治十六年に上京(否、まだ東下りか)するが、西南の役から、まだ六、七年である。

鎌倉を抜け東へ北から西から何かが興る。
何かを興そうと人々が集まってくる時代であった。

詳しい事情は専門家に任せるとして、子規の第一の間違いは、外国語、数学が苦手であったことである。

これは彼にとってどうでも良いことであって端から必要としなかったのである。多分に彼が学んだ哲学に由来するかも知れないが、文学へと傾倒していったのである。

この頃より俳句を始め青春を謳歌し、ベースボール(野球・ノボール)に熱中するのである。

明治二十二年、喀血、杜鵑は抱卵し、何が気に食わなくて鳴きわめくのか、血まで吐いてと、升さんは己の心境と比べて居たのかもしれない。

この時正岡子規が誕生したのである。

これからは益々文章にのめり込んで行くのであるが、二十五歳になって漸く自分の有り様に依る俳句づくりを始めるのである。

郊外や各地に出掛け句作し写生論へと進んで行くのである。

明治二十八年四月、子規は日清戦争に従軍するのであるが、時已に遅し、戦争は終っていて、凡そ一ヶ月半を掛けて大陸と日本を往復するのみであった。

此れが第二の間違いで病を大きく拗らせる要因になり、神戸での静養を余儀無くさせられるのである。

その年の八月松山に戻るのであるが下宿・愚陀佛庵に転がり込まれた漱石が日々開かれる句会を階段に座って観察している姿を想像すると愉快ではないか。

愚陀佛庵に五十二日滞在して東京に帰るのであるが、一年後にはほぼ寝たきりの状態に成るのである。

明治三十五年九月十八日朝。

糸瓜咲いて痰のつまりし佛かな

あゝこれが自分かと自嘲気味に見詰めて居る己のおかしさに心安らいで行くのである。

九月十九日没ス 享年三十五 月給四十円

一字余分になってしまったが、せめて後十年長く子規が生きて居て呉れたなら、現在の俳句界は如何成って居ただろう。子規は月並俳句を糾弾したが、今周りを

見渡しても、月並俳句の氾濫ではないか。

早く平成の子規が出現しないと、本当に俳句は滅んでしまうかも知れない。
子規は十年早くこの世を去ると言う大きな間違いを犯してしまったのである。

それにしても升さんと野球がしてみたかった。

end . . .